

「読書力」習得の差は、日米の教育の考え方、現実の姿にあります。アメリカの学校は、読書力（読解力・Reading Skill）なしにはサバイブできない様に出来ており、幼児から読書力を身につけさせるのを第一の目標としています。「読書」に対する、アメリカの学校の集中した取り組みの例をいくつか紹介しましょう。

「Reading for fun（読書は楽しい）」幼児にも思わせるような仕掛けや指導が、いたるところで見受けられます。大きな本屋さんや図書館では「Reading time」は日常茶飯事のように開かれていて、誰でも気軽に参加できます。また、「Reading by nine(9)」という標語は、「9歳までに読書力を身につけないと、一生アカデミックな力が身に付かないよ」という意味で、小学校低学年の読書力向上のキャンペーンに使われています。

また、学年末に近いこれからの時期、「校長先生が豚さんのお尻にキスをした」「校長先生が頭を剃って丸刈りになった」というような新聞記事が多くみられます。これは、昨年初に新学年が始まった時に、校長先生が、例えば「学校全体でこの1年間に5万ページ読んだら」と子ども達に約束して、負けたペナルティです。もちろん、校長先生は喜んで罰を受けます。

## 「読書」が、勉強の基礎？

アメリカの学校が「読書」にこれだけ熱心になるには、はっきりした理由があります。それは、アメリカの教育が「読書力」に基礎をおいたシステムとして作られているからです。

小学校5年生の社会の教科書は500ページもあり、説明が懇切丁寧で、読めばわかるようにできています。この教科書を授業中にクラス全員で読み合わせるということはありません。児童が自分で読めばわかるように書いてあり、自分で読んで勉強することを想定して作ってあるからです。

また、高校の社会や理科の宿題の基礎的事項理解のプリントは、その解答が教科書の中に書いてあります。生徒は教科書を丁寧に読んで、その答えを見つける作業をすることを要求されているのです。

要するに、アメリカの学校は、書物に書いてある事実や考え方を自分自身で正確に読み取ることを基礎とした教育なのです。これが理解できると、現地校での勉強のさせ方が良く分かります。

## 日本語での「読書」は？

ここで、日本の教育での読書力向上に対する努力の少なさ、教育者の熱意はあるとしても現実的な仕掛けの少なさをあげつらうのは止めておきます。ただ、ご自分が日本で受けた教育と、お子さんが現地校で受けている教育を比べてみると、「読書」に対する取り組み、アメリカの集中した取り組みが十分理

解できると思います。

ただ、これだけご理解ください。学問的にはまだ十分解明されていないようですが、「一つの言語で身についた読書力は、他の言語に移る」というのは、バイリンガル教育に携わっている教育者の共通理解です。

何語であっても、子どもにとって得意な言語でしっかりした読書力を身につけておけば問題ないということです。別の言い方をすると、子どもの知的発達を促す為に、読書は欠かすことが出来ないということも、ご理解ください、

## 何をすればいいの？

さて、理論（理屈？）はこれまでにして、次は実践編です。実践は、前回のこのコラムで説明した、「家庭での読書環境作り」です。家庭で、子どもが読書（英語であろうと、日本語であろうと）に勤しめる仕掛けを、保護者が作ることです。

まず、ご両親自身が読書する。ソファにゆったりと座り、静かに読書をする。新聞雑誌でも結構ですが、出来たらしっかりした内容の本を読んでください。子どもまで背伸びをして、同じような本を手に入れます。お子さんにも、好きな本を持って横に座るように勧めてください。時々声をかけて、問いかけするように、本の内容を聞いてあげてください。試験ではありませんから、深追いはしないで、軽い質問で結構です。これを、習慣として定着させる、努力をしてください。

つぎは、家庭内に日本語のライブラリーを作ることです。帰国する友人から古い本を貰い受け、家の中に放置して置きます。子どもがぶらりと手に取れるように。子どもは何に興味を持つか分かりません。

実践編は、簡単ですが、これだけです。

## まとめ：現地校での「読書」が鍵！

話が長くなったので、ストーリーをまとめましょう。

現地校で、週5日、英語で指導されている読書力向上のトレーニングをしっかり受けて、読書力を身に付ける。英語での読書力が、日本語での読書力向上をもたらす。

そして、家庭で日本語で身につけた日本社会についての知識と慣習を基にして、大人のレベルの常識を読書を通して自分自身で学ぶ。

これが、「海外に住んでいても日本人の大人として活躍できるようにする」、私の体験的方法です。

私の体験的「子どもを日本人に育てる方法」を、2回にわたって紹介しました。皆様のお役に立てばいいのですが。

このコラムは本誌13号(2007年3・4月号)に加筆訂正したものです。  
ご質問に答えたくて、もう一度掲載させていただきました。お許しを。